

特集：大学のデジタルトランスフォーメーション（DX） と学生生活

趣 旨

新型コロナウイルスによって日本の大学教育がオンライン化したことは衆知のとおりである。この原稿を執筆している 2022 年 1 月は感染拡大の予断を許さない状況にある。このような中で私たち大学関係者の関心は、一度オンライン化した大学教育は今後どうなるのか、我々はどうか対応すべきか、に尽きる。多分にその解はコロナ禍以前の姿に戻るのではなく、オンラインと対面の「ベストミックス」の教育を提供することなのだろう。しかし、言うは易し、そのゴールをどこに据えるのか、どうやってゴールにたどり着くのか、未だに模索中である。

むろん大学教育のオンライン化はコロナ禍以前も脈々と取り組まれていた。本誌前号（21 号）の特集「オンライン学習の可能性と課題」を参照頂ければ、その一端がお分かりになるだろう。2020 年から始まったパンデミックに際して、今までの積み重ねが活かされたと言える。しかしコロナ禍以降の取り組みはそれ以前の想定とは大きく 2 つの点で異なる。1 つは規模である。コロナ禍以前には大学教育のデジタル化など一顧だにしなかった関係者も否応なく巻き込まれた。もう 1 点は前提である。コロナ禍以前は、人の繋がりが十分に保たれ、学生が従来通りのキャンパスライフを過ごす中で大学教育のオンライン化を前提にしていた。つまり学生の生活や支援のオンライン化はほとんど想定されていなかった。しかしキャンパスに於ける学修と生活の両方が対面で叶わなくなった状態を経て、これらを総合的に捉えるような大学の在り方が問われている。

2020年度のコロナ禍での新学期開始時には、関係者も大学教育を止めないという思いでひたすら対応に追われてきた。そして約2年が経った今、大学教育と支援に関連する多くの知見が蓄積され、今後の方向性への示唆を得られつつある。

これまでに得られた知見の1つは新たな教育に対する学生の多様な受け止め方である。対面授業のオンデマンド化によって、学生は時間も場所も選ばずに学べるようになった。しかし物理的に他者と触れ合う機会も減った。この変化を歓迎する学生もいれば、苦慮する学生もいる。学年によっても違う。オンライン化された大学で1年生から学ぶ学生は、これを所与とみなすようになっている。生まれた時からスマートフォンがある時代に生きる子供たちが、スマートフォンがない世界に戻れないように、と言ったら言い過ぎだろうか（もちろん子供たちだけではないというオチがつく）。

学生の事例を見よう。私が受け持っている私立大学の授業では、キャンパスを持たない大学での学び（アメリカの私立ミネルヴァ大学では、学生は4年間で4大陸7都市の寮に滞在し、世界各地にいる教員から討論を中心としたオンライン授業を通じて学ぶ）を題材に、学生はディスカッションをし、短いレポートを提出する。コロナ禍1年目である2020年度には、一定数の学生からこのような学びに対して懐疑的な意見が聞かれた。ところがコロナ禍2年目の2021年度には肯定的な意見が多数を占めた。物理的なキャンパスへのこだわりは、そこで一定の時間を過ごした3年生以上には見られるが、2年生以下には見られないのも如実に示された。ある学生からは大学の現地性が重要であるとの意見もでたが、別の学生からは、現所属大学に足を運ばないためキャンパスには特別の愛着を持たないとの意見もあった。オンライン化が進み、学生の中にも「大学」に対する多様な受け取り方がることが分かる。

実践によって始めて気付いたものには、学生の学び方も含まれる。録画された授業において倍速で動画を観ることや、そもそも動画を観ないこと、そして回線を繋いでいるだけの学生の多さはよく

聞かれる。またデジタル化された教育データを通じて、学生がどのように学ぶのか、その一端が分かってきた。これまでに学生の学ば方を十分に把握することは難しかったが、これが学習ログから分かるようになってきたのである。ちなみに私の授業はディスカッションが中心なので授業前の動画視聴を必須にしているが、双方向授業が始まってから動画を見始めている学生が一定数いることは LMS のログから分かる。これをどう活かしていくのかは今後の課題だが、まずは学生の学びを改善するうえで大きな手掛かりを得られる状況となった。そして教員が一方的に話すだけの授業がオンデマンド動画になった時に、多くの歓迎する声とは裏腹に、実は旧態依然の代物として批判が多かった講義も、学生同士の繋がりをつくるきっかけとなるなど知識伝達以外の役割があったことに初めて気が付く。これは学習と学生の生活の近接を示すものである。

このような問題意識を元に、これまで学生の調査や支援に携わってきた論者に、各大学での経験と実績を踏まえつつ、コロナ禍での実情と彼らの学び、そして今後の課題について論じていただく。今後の社会像および大学像を描くのは容易ではないが、コミュニケーションや移動が制限なく行える社会と、デジタルトランスフォーメーション (DX) により教育の改善を行う大学を想定した。

沖氏は立命館大学の学生や教員に対する調査をもとに、コロナ禍の Web 授業に対する意識や期待、また満足度や課題を明らかにすることを試みている。ここでは豊富なデータの要因分析等を通じて、これまで一般的に想定していなかった結論を導いている。学生は対面授業が Web 授業よりもいいことを示すことを求め、教育 DX をさらに活用しなくてはならないという指摘である。「対面授業」か「Web 授業」か、という単純な選択ではなく、これまで以上に学びの「質」を重視し、対面ならではのインタラクティブな授業を志向することが提言されている。

大山氏、西川氏、朝日氏の論文は、大阪大学の学生支援プロジェクト「阪大ウェルカムチャンネル」の紹介を通して、ポストコロナ

における DX 時代の学生支援の在り方について考察している。アンケート調査の分析や学生の部活およびチャンネルに参加した学生の声を通じて、学生同士のつながりは授業内と授業外で完全に分離できるものではないことを示し、新たな学生生活支援を提言する。そして既存のコンテンツや活動をオンライン化しただけではなく、その在り方、すなわち文字通りの DX (Digital Transformation) が改めて問われることとなったと指摘する。

安部氏、丸山氏は 2021 年 10 月に名古屋大学教育基盤連携本部高等教育システム開発部門によって実施されたシンポジウム「大学のデジタルトランスフォーメーション (DX) と学生生活」での講演やディスカッションから得られた示唆をまとめている。本論文はオンラインの活用によって学び方の選択肢が増えた環境下で、次の 3 つの課題を指摘する。すなわち、オンラインによる教育の正と負の 2 面性、さらなる学習デザインの必要性、そしてインフォーマルな学びや出会いの大切さである。本論文からは、大学において学生がよりよく学ぶことを念頭に対面とオンラインの適切な組み合わせや使い分けを模索していくために、実践や対話に基づく多くの知見が得られるだろう。

論文を執筆いただいた方々には厚く御礼を申し上げる。今後のキャンパスが DX を伴ってどのようなかたちになっていても、学生が正課と正課外の双方の活動に取り組める環境が求められることに変わりはないだろう。未来のキャンパスにおける学生のさらなる学びの可能性を引き出すために、本特集が一つの契機となり活発な議論が展開されることを期待する。

編集委員長 加藤真紀